

Title	昭和二十四年度秋期史學科見學旅行記
Sub Title	
Author	淺子, 勝二郎(Asako, Shojiro) 麻布, 弘海(Azabu, Kokai)
Publisher	三田史学会
Publication year	1951
Jtitle	史学 Vol.24, No.4 (1951. 4) ,p.149(589)- 151(591)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19510400-0149">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19510400-0149</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

○曆、三島曆、伊勢曆、江戸曆、

○キリシタン關係文書其の他、ハルマの辭書（ゾーフハルマ）

厚生新編……（百科全書の譯本）（原著者はシヨメール）シ

ヨメールの辭書……（オランダ譯）世界地圖、切支丹燈籠拓

本、

○製本の方法（卷子本、折本、旋風様、袋とじ、枯葉又ハ胡蝶装、大和綴又ハ列帖）

○版木の變遷

等を見學せり。頼家奉納の心經一卷は將軍直筆として當社に奉納されたもので現在、この本一つあるのみとの註、又病氣平癒を祈る旨の與書あり。文化展を見學後社務所に戻り、尊氏、顯家、頼朝等の古文書及び瓦（男瓦、女瓦又は軒丸瓦、軸平瓦）を見學せり。大體考古學的方面の古墳出土品、瓦（國分寺）等は清水先生の御説明を受け古文書は淺子、清水先生を圍み、一同で讀み非常に得る所大であつたと思ふ。三時半三嶋神社を辭し國分尼寺跡に到り清水先生の御説明により礎石（五重の塔）を見學、四時三嶋驛發途中東洋史學科二年在學中の山崎君宅に寄り所藏品（江戸時代の將軍家所藏品録等）を拜見同處にて解散せり。以上にて旅行報告は終りであるが委員の手落ちで通報充分ならず、充分の參加者を得られなかつたのは残念であつたが、一行十二名愉快に見學旅行をなし益々親密の度を増し得た事は大いに慶ぶべき事と思

ふ次第である。（終）

（山田晴雄記）

## 昭和二十四年度秋期史學科見學旅行記

十一月二日夜行にて東京驛發、一行淺子教授外學生廿二名。

十一月三日朝京都驛着、學生二名を加え總勢廿四名となる。宿舎にて小憩のち本派本願寺（西本願寺）を訪れ、史學科の先輩出雲路氏の案内で、まず桃山建築の傑出した遺構である唐門、大書院、飛雲閣等を見學、をわつて閣内の招賢殿で茶菓の接待にあづかつた。

飛雲閣は元和年間に聚樂第から移建されたものといわれ、滴翠園内の滄浪池に臨む書院造の三層閣で、各層の配置、華頭窓の排列、出書院の入母屋と船入、間の唐破風等機智的な對照の妙と諧調の美をみせている。これはまた金閣の靜に加えるに動即ち前者の瀟洒に加えるに豪壯味を以てしたものともいえよう。閣内には永徳山樂等の筆と稱する襖繪がある。

一行は更に大谷派本願寺（東本願寺）から枳殻邸を問ひ、博物館に赴き智積院の障壁畫、石山寺縁起繪卷等を鑑賞した。

智積院の櫻楓圖は桃山時代の繪畫中最もすぐれたものの一つで現在は長谷川派の作品と解せられている。

十一月四日は二條城から——本城は慶長年間家康が伏見城の一

部を移築したもので、現在のものは往時の二ノ丸殿舎、唐門を入ると車寄、遠侍、大廣間、黒書院、白書院等があり、襖と壁には狩野派の金碧畫が描かれている。桃山の豪壯の色未だ褪めやらずとでもいうべきか——京都御所、ここで紫宸殿、清涼殿、東庭等を拜觀、をりからの雨の中を桂へ。

桂離宮はもと秀吉が正親町天皇の皇孫智仁親王の別業として造營したもので、のち小堀遠州が幕命によつて殿舎、林泉に大改修を加えた。殿舎は古書院、中書院、御幸殿と連り、簡素を旨とし、襖繪の如きも専ら水墨或は淡彩を用いている。庭園も徒に奇岩怪木を弄せず、自ら清楚な品格を失わない。

離宮を辭し苔寺で有名な西芳寺へ行く。

庭は寺傳には夢窓圖師の再興とあるが、山の斜面と下の平地の二部より成りそれぞれ趣を異にする。庭内一面に苔を敷く、雨の西芳寺風情また一入というにはいさゝか雨が強そうだ。嵐山へ出て宿舎に歸つた。

十一月五日いよ／＼京に別れを告げ宇治から奈良へ。

平等院鳳凰堂は入母屋の中堂、左右に翼廊と寶形造の樓閣、後に尾廊を具へ、その名の如く鳳凰に象り優美輕快なれども、中堂の裳階、勾欄等に藤原の裝飾性を見逃すことはできない。堂内の定朝作阿彌陀如來像は藤原的なものの最も洗煉されたもの。堂の構造はすべて極樂淨土の莊嚴を彷彿せしめるように意圖されてい

る。

宇治河畔にて小憩後奈良に至り、宿舎に立ち寄り輕裝して東大寺、新藥師等を廻つた。

東大寺は治承四年兵火に罹り、その再興は後乘坊重源によつて南宋から將來された天竺様なる建築様式によつてなされた。當時の遺構はわづかに南大門だけである。この建築の特色は挿肘木といつて、柱に挿し込んだ肘木が順次にせり出して深い軒を支える點にある。この南大門に快慶、決慶作の二王像が安置されている。

新藥師寺では金堂、同堂安置の藥師如來像、十二神將像寺何れも健在だが、本寺の前身といわれる香藥師の本尊であつたといふ傳説から名づけられた白鳳の名品香藥師如來像は、盜難後依然として消息を聞かず、まことに残念なことである。

十一月六日博物館見學後法華堂(三日堂)に詣でる。堂は唐招提寺金堂に相通する當初の五間四面四注の前面に鎌倉の禮堂を加え、均正を缺くとはいえその機智的構造はなかなか面白い。堂内に數多安置されている尊像の中、本尊不空羅索觀音像、日光・月光菩薩像等は特に心惹かれた。

堂を出て一行は二班に分れ、一は西大寺から西京へ、一は西大寺から秋篠寺、法華寺方面へ

藥師寺は天武天皇の勅願によつて高市郡木殿に創建、のち平城遷都に伴い養老二年現在の地に移建されたといふ。

東塔は三層であるが各層に裳階をつけ、その小屋根と大屋根が上手に交錯して美しいリズムを奏でている。金堂薬師如来像、東院堂聖観音像は稀代の傑作で、前者は草創當初のものであるか移建當時のものであるかにわかに断じ難いが、圓熟したる白鳳精神が既に雄渾な天平精神を胚胎していることは否定できない。後者は本寺建立よりやや後の時代のものであるろう。

唐招提寺金堂は天平寶字三年の建立で、單層四注七間四面前面一間吹抜き大棟に鴟尾を上げている。立ち並ぶ列柱の上に大きく高い屋根を文える金堂はあくまでも壯麗である。本尊盧遮那佛像が草創以來のもので天平初期のものとは作風を異にする。肥満重厚な塊量、森嚴な相貌を呈している。

法華寺の十一面觀音像は貞觀佛で、天竺訖陀羅國の文答師が光明皇后を拜寫したというのは單なる傳説にすぎない。森嚴な尊容の中に優美な情感を湛えている。

秋篠寺には有名な技藝天像がある。

十一月七日奈良驛より關西線で法隆寺驛下車、金堂や五重塔が遠くから見えていた頃は、驛に近づくにつれ心のときめきと禁じ得なかつたのであるが、金堂は解體され五重塔の修復も未だ成らざる今日、淋しさをどうすることもできない。しかし中門はじめ數多の建築、釋迦三尊像、藥師如来像、觀世音菩薩像（百濟觀音）、玉虫厨子、橘夫人念持佛厨子等建築、彫刻、工藝の諸般に互

る貴重な遺構、遺品にとほしからず、十分これに満足することができた。

法隆寺から聖德太子の夢想三昧定の道場として創建され、天平十一年僧行信が再建した現存最古の八角圓堂である東院夢殿に、彫法が勁直で浮彫的な飛鳥彫刻の特色を具えた觀世音菩薩像（夢殿觀音）を、中宮寺に彌勒菩薩像（傳如意輪觀音像）天壽國曼荼羅瀟帳等を拜し、更に法起寺に飛鳥の三重塔——法輪寺のそれが昭和十九年雷火に失われた今日唯一の飛鳥の五重塔——を仰ぎ、漫歩法隆寺驛へ出て解散した。

きづかわれた天候も行半ばにして回復し、一同元氣に愉快な見學旅行ができたのは幸だつた。最後にこの行種々便宜を與えられた方々に對しあつく感謝の意を表する次第である。

（淺子勝二郎・麻布弘海記）

## 昭和二十五年春期川越市喜多院・中院

### 見學旅行記

雨の降る六月十日、他學部學生數名を交へた我々史學科生廿二名は、伊木竹田兩先生指導の下に東上線にて川越市に向つた。

丁度梅雨期のこととて沿線の其所此所に蓑を着けた百姓の田植姿が眺められ、常々都會で勉強し生活する我々にとつては、此の